

[道場めぐり 川越市 新陰流兵法・転会]

新陰流兵法・転会を主催する渡辺会長は、この道修行に三十年をかけている。渡辺忠成氏。三十六歳。したがって氏は六歳のときから新陰流の剣法を学んでいることになる。

そして渡辺会長を中心に現在当流にいそしんでいるもの約五十人。下は六歳の少年から上は六十代の老壮年層まで、女子も含まれているが主力は二十代、三十代の青年層である。場所は川越市立武道館と豊島区立千登世橋体育場が毎週日曜日の午後一時から四時まで、市川市立体育館が毎週金曜日の午後六時から九時までである。

近年、剣道はもちろん武道が一般に注目されるようになってから久しい。心身の錬磨に日本の伝統に裏づけられた武道の心が適応すると、ようやく認識が高まってきたからである。

武道は戦後のかなり長い時期、米軍の占領政策の一環として禁止されてきた期間があり、その禁止令が解かれても後遺症はかなり後まで尾をひいた。剣道を例にとっても、全日本剣道連盟が発足したのは昭和二十七年十月である。

それでも、まだその頃は一般の間に“武道アレルギー”があった。戦前、戦中を通じて戦争そのものの全くの手段としてのみ武道が前面に押し出された結果、いわゆる戦争責任のかなり大きな部分を背負わされたことによる。以後、武道は、その影を払拭するため、ある意味でのイメージチェンジをはかってきた。復活普及を第一目的に他の外来スポーツと同様、一般的な競技の性格を強調したと言えると思う。

しかし武道は発生の源はともかく、技の錬磨と合わせて精神の陶冶を大きな目的としてきた。

それが、まず「復権」に目を向けたために、ややすれば両輪の一方である精神鍛練面がなおざりにならざるを得なかったとは言えないだろうか。とりあえず、外来スポーツと肩を並べることが第一だったからである。やむを得ないと思う。

だが、昭和四十年代前半、あの高度経済成長の時代に、武道、とりわけ少年剣道が急速に発展したと同時に、世上は消費が美德としてもはやされ「昭和元禄」などという言葉に多くの人々が酔った一時期がある。その時の反省として伝統文化である武道の持つ精神的価値が次第に再評価されてきた。

怠惰と退廃に流されようとする傾向に期せずして歯止めがかかったと解釈してもいいだろう。剣や徒手の武道的鍛練が近代戦争とは無縁であるという定見も各界に生まれつつあった。さらに、個人にとって風雪に耐える厳しさが人生にいかほど大切であるか。そのために心と身体両面をバランスよく鍛える手段に武道のエッセンスがいかほど必要かも随所で言われるようになった。

「知・徳・体」の三本柱が教育の理想とされながらも、これを具体的に実践する実効的方法はいったい何なのか。そこでひとつの方途として武道がクローズアップされたとも言えると思う。

だから武道は戦後二度目の転機を経て今日に至っている。その当時、わき起こった命題として武道とスポーツの相違が議論されて久しい。そしてその結論はまだ出ていない。だが、そういう議論とは別に武道は年々その実施人口を増加させ、いわゆる現代武道から、その源である各種古武術への関心も近年次第に高まりつつある。

前置きが長くなったが、新陰流兵法もその古流儀のひとつである。流祖は上泉伊勢守秀綱(信綱)で、秀綱はその師、愛洲日向守移香斎から陰流の極意を受け、新たに一流を編み出して「新陰流」を号した。

続いて二世は石舟斎柳生宗厳。それが柳生新陰流として宗厳の五男宗矩に始まる江戸柳生家と宗厳の孫、兵庫助利厳に始まる尾張柳生の二宗家に発展した。

内容にちょっと触れると、他の古流でも同様だが、新陰流の修行は型の稽古に終始する。それを勢法という。この勢法が十分に身につけてから稽古試合を時々行うが、勝敗は問わない。あくまでも相互の弱点矯正と研鑽が目的である。

その稽古に使うのは“ひきはだ竹刀”という袋竹刀で、これは革の袋に割った竹を差し込んだもので鍔はつけない。革袋は表面に朱漆が塗られて美しく、この種のものには他の流派には見られない。大きな特徴である。また、防具はつけずに素面である。

印可は伝位と言われ六段階に区分されていて「大転」「小転」「天狗抄」「天狗抄奥」「目録」「内伝」と称する。目録以上になって初めて免状が授与されるが、新陰流はここから師範クラスだそうである。技の勝口は小手打ちが主で、これは相手と対峙した場合、最も近い間合いということで極めて合理的である。

また、ほんの一部を除いて気合はかけない。無声である。構えのことは「位」と称し最終的には無形の位を尊ぶ。このように新陰流は、無声、無形、無刀など「無」が多いが、これは転(まろばし)哲学が基本だそうである。

新陰流が多用する“転”とは禅の用語で、相手によって己を自在に転化させる“隋敵”が本旨となる。新陰流には、このほか参学円之太刀として「一刀両段」「斬釘截鉄」「半開半向」「右旋左転」「長短一味」などの禅語がそれぞれ太刀名となって使用されている。

要するに思想としての剣の意味と技の理論が混然となって進展し、剣禅一致を核として徳川三百年の幕府体制の中に生き続けた。

江戸、尾張の両家に伝えられ、連綿たる歴史に足跡を刻んできた体制の剣法、新陰流。いま転会グループによっても日々研修、錬磨され、さらにその命脈を後世に伝えようとしている。渡辺会長の若さと熱意に期待したい。

